からむし

70
麻生区文化協会会報

群生のヤマユリ　柿生のおっ越山（オッコシヤマ）で

7月のタウンニュースにヤマユリ観察会の案内が掲載された。柿生のおっ越山広場に集合して観察会を行うと書かれていたので、電話で早速申し込んだ。麻生区に山あるの？ ヤマユリって麻生区の区の花だよね。群生ってすごい！期待と不安が混ざる中、カメラ片手に柿生駅に降りた。柿生中を目指して山らしき景色を探す。

柿生トンネルの立て札の横の階段を上がっていくと、おっ越山ふれあいの森の入口に到着。申し込んだ人と「柿生の里クラブ」のボランティア団体の方たちの20人位で細い山道を進んでいった。資料や歩きながらの説明でこの団体が11年前から「未来へ手渡す豊かな多摩丘陵」を保全していこうと誕生したことを知った。毎月2回ほどの活動日で下草狩りや倒木、間伐などを続けて7年目にヤマユリが初出現し、10年で増えていることを確認しているそうだ。厳重に柵で覆われ施錠された保全地区に入る。やぶや草が生い茂る山道を下っていくと、傾斜地の奥に真っ白いヤマユリが、数本群生していた。目を凝らすと奥の方にも何本か認められた。どれも大輪である。

麻生区では、かつてはいろいろなところで咲いていて、その香りでむせ返るほどであったらしい。昭和40年代から急速な都市化が始まり、里山が維持されなくなったことで、多くの自然が消えていったが、いくつかのボランティア団体の地道な努力により、こうして美しい大輪のヤマユリに出会えたのである。まるで人々の思いが花開くような感動を覚える。これからも関心を寄せていきたい。

（写真と文／小田島 紀美）

からむし第70号のラインナップをご紹介します

P1　麻生区の風物紹介
今号は、おっ越山のボランティアによって守られている「群生のヤマユリ」について、小田島紀美さんが紹介します。今号から表紙絵はカラー写真になりました。

P2　麻生区区長・文化協会会長対談
これからの麻生区の街づくり、文化行政のあり方について、新任の三瓶麻生区区長と菅原会長が対談しました。

P4　書道人生
「今を生きて 今を切り取り 読めて解かる書で作品作り」
専門委員の笠原道汀さんがご自身の書道人生を寄稿されました。

P5　文化講演会／デッサン会報告
文化サロン部主催、岡部信彦先生による文化講演会「新型コロナウイルス感染症の現状と市民生活」の記録と、恒例の「舞台衣装の女優さんを描くデッサン会」の報告です。

P6　今後の『からむし』のあり方を語りあう
『からむし』は創刊70号を迎えました。これを記念して、歴代の広報部長に集まっていただき、これまでを振り返るとともに、文化協会のこれからのあり方を議論しました。

P8　第37回麻生区文化祭のお知らせ
9月18日㈯「邦舞・邦楽」「第37回吟詠大会」、10月30日㈯「洋舞」「第33回麻生区俳句大会」、10月29日㈮～11月3日㈬「美術工芸展」のお知らせです。

編集後記

麻生区区長・文化協会会長 対談

文化協会会報誌『からむし』第70号発行を記念して、今年の4月に就任された三瓶清美麻生区区長と菅原敬子文化協会会長の対談を、8月13日に麻生区長室にて行いました。麻生区の「文化・芸術の街」としての今後のあり方や、区政と文化協会との関わりについてなどをテーマに、コロナ禍におけるご苦労話なども交えてお話しいただきました。

＊＊＊

麻生区の印象

菅原　麻生区は3代にわたって女性の区長をお迎えするという、めったにないことが起きてうれしく思っています。さて、これまでは外からご覧になっていた麻生区、区長に就任され、どう感じていらっしゃいますか？

三瓶　麻生区は、文化の街、音楽の街、映画の街ということで、以前から駅前にはよく来ていました。区長に就任して車で回ってみると、緑が豊かで、街の人が穏やかで、落ち着いた良い街、奥が深い街という印象を受けました。

菅原　区役所が駅前にあるという素晴らしい立地、文化施設と区役所が街づくりの中心という自慢したい環境に恵まれていますね。区民の皆さんに会われた印象はどうですか？

三瓶　コロナ禍で区民まつりなど多くのイベントが中止となったり規模が縮小されたりして、区民の皆さんと直接会う機会が減って残念です。皆さん、街づくりにかける思いが強く、文化・芸術への思いも強いと思います。

文化・芸術において ハード・ソフト共に恵まれた環境

菅原　三瓶区長には、区長就任前に所属されていた部署でも先駆的な立場からいろいろと関わっていただき、こちらもそれにお応えしようと努力してきました。この地区は建物だけでなく、人も他区とは異なる部分があるように思うのですが。

三瓶　ハードとソフトの面でお話をしますと、例えば、昭和音楽大学のテアトロ・ジーリオ・ショウワなど、歩いて行ける場所にオペラを観ることができる施設があり、恵まれていると思います。区画整理でこれが実現したのですが、もともとこの街には文化・芸術に携わる方だけでなく、文化・芸術に造詣の深い方もお住まいなので、文化・芸術をつくる人と見る人が相まって目が冴えてくる、そういう雰囲気を感じます。

菅原　そう言っていただくととてもうれしいのですが、放っておいても育つものではないのですよね。区長としては、今後の文化・芸術の街づくりを、予算も含めてどのようにお考えでしょうか？

三瓶　行政が旗を掲げただけでは街づくりはできません。街の人々が関わってこそ進めていくことができます。ただ、どちらか一方でなく、相互に、一緒になってつくっていくべきでしょう。予算の面では民間の力をお借りすることもありますが、文化・芸術の街が行政の力で育つのならば努力は惜しみません。

菅原　同じ方向を向いて街づくりを進めるため、良いものを育てていくためには、ある程度予算がないと難しいです。実際、胡桃バレエ団の子どもたちの公演にあたっては、長年の願いだった市民館ホールのリノリウム（床材）を区の予算で敷いていただき、子どもたちが育つ立派な舞台ができました。文化協会は川崎市からのお金の範囲だけでなく、個人・団体の会費も合わせて自助努力しながら活動しています。コロナで財政は大変な状況ですが、川崎のイメージづくりのためにも予算を確保していただきたいです。

三瓶　麻生区は街のブランドイメージを大事にしています。文化・芸術を大切にすることで、街の価値も高まると思います。

芸術祭の役割

菅原　今年度は、川崎市が誇る「川崎・しんゆり芸術祭（アルテリッカしんゆり）」の監査役を区長と共に務めることになりました。膨大な資料を読まなければなりませんが、内容的にも他区に誇れる芸術祭だと思っています。良い評価をいただけるでしょう。

三瓶　アルテリッカの運営委員会で、ジャズピアニストの国府弘子さんが涙を浮かべながら、徹底した感染防止対策のもとコンサートを実施できたことに感謝されていました。こんな

時だからこそ、という彼女の思いが伝わってきました。アルテリッカでは、ボランティアの皆さんも愛情を持って関わられていて、素晴らしいですね。

菅原　ボランティアの皆さんのご協力により、12年の間にアルテリッカは育ってきました。アルテリッカを観に来るお客様は区内の方とは限らず、川崎市以外の広い範囲からも来場されるので、新百合ヶ丘の良さを広くアピールすることにも寄与しています。ただ、やはり麻生区の現状としては、高齢化率が高いですね。その点、区長はどう捉えていらっしゃいますか？

三瓶　確かに麻生区は高齢化率が高いですが、街は若い人で活気があります。いろいろなところで世代交代も起きています。これまで麻生区で培ったノウハウを次世代に伝えていきたいですね。アルテリッカには子ども向けの演目も多く、区外から来られたお客様が「新百合ヶ丘ってこういう街なんだ」と良い印象を持たれて、新住民を増やすきっかけにもなっていると思います。

菅原敬子文化協会会長（左）と三瓶清美麻生区区長（右）

行ってみたい、住みたい街に

菅原　2030年の開業を目指して、横浜市営地下鉄ブルーラインが新百合ヶ丘まで延伸されることが決まっていますが、この機会に駅前のあり方を考える必要があるのではないでしょうか？

三瓶　今後は区外の人にも行ってみたい、住みたいと思われるような街づくりがさらに重要となってきます。地下鉄の延伸は、街づくりを次のステージへ進める良い機会で、リーダーシップが問われると思っています。

菅原　麻生区は戸建てが多く、高齢者の多さがひときわ目立つ地域です。近年増えている空き家問題も課題ですね。

三瓶　高齢化や駅前の街づくり、日頃生活している時にはあまり気になりませんが、こうだったらいいのにという思いは皆さんお持ちでしょう。それを取り込んでいきたいと思っています。道ゆく人はゆったりとしていて、とてもお洒落で、高齢者も豊かに暮らしているように見えますが、市民の生の声を聞くことが大事だと思っています。コロナ禍では、市民の生の声を聞く機会が少なくなっています。

菅原　一般市民は、区長と直接話をしたり聞いたりする機会や場所がほとんどないのが残念ですね。三瓶区長は女性同士ということもあり、身近に感じられていろいろ聞きやすいです。文化協会としても、このような対談の機会をいただけたことに感謝いたします。

区政40周年とこれからの街づくり

三瓶　来年は区政40周年です。そして、2024年には市政100年の節目を迎えます。後になって振り返ったときに、「あの時はこうだった」と自分でも誇りを持って言えるようにしたいです。

菅原　麻生区周辺には、昭和音楽大学や日本映画大学をはじめとする6つの大学があります。大学人も街の貴重な財産です。大学人の知恵も、街づくりの知的分野で活かしていただきたいです。

三瓶　皆さんのお知恵をお借りしながら、今後も文化・芸術の街づくりを推し進めていきたいと思います。本日は多くのうれしいお言葉をいただきまして、ありがとうございました。

菅原　大変有意義な対談でした。本日はお忙しい中、お時間をいただきありがとうございました。『からむし』第70号を、会員の皆さんが楽しみに読まれることと思います。

（文／橋本 周）

取材した編集委員も一緒に記念撮影

書道人生
「今を生きて 今を切り取り 読めて解かる書で作品作り」

専門委員　遊汀　笠原 恒子

60年）11月18日　月曜日

朝日新聞

中原小の「独話」活動

かわさき

川崎市立中原小学校（榎本博行校長）の全クラスで毎朝続けられている「独話の時間」。一人が二、三分のスピーチをし、それについて皆で話し合う十五分ほどの短い時間だ。同校の笠原登教諭（四八）＝写真＝が提案し八年前から続いている。

全校レベルで「独話活動」を毎朝続けている学校は全国でも珍しい。「ことばを大切にする子を育てたい」という笠原先生はこのほど国語教育部門の功労者として博報堂から「博報賞」を贈られた。

「子供たちの個性を伸ばし、ペーパーテストの結果だけでは教えない子を何とかしたい」と考えた先生は、家に帰って教科書を眺めればわかるような授業はしたくなかった。

たとえば正解が一つしかない算数でも結果より経過を大切にしたい。そう考えて先生はすべての授業の中に「（教師が）待つ時間」を作った。四十五分の授業で教師が全く口出しをしない十五分をつくり子供たちに自由に発言させる。けれど、人前で話せない子は多い。授業となればなおさらだ。そこで考えたのが「独話活動」だった。

ある二年生の男の子は、ひとりでおふろに入った時、頭も洗わずに水でっぽうで遊んでしまったことを語る。四年生の女の子は世界一高いという高層ホテルの数字を出して、こんな高さが本当に必要なのかと問いかける。六年生になると伝記をもとに自分の将来を述べる子、上野公園の西郷隆盛像の犬に興味を持って調べた子など、視点は日常だけでなく未来や外へ広がる。

「授業ではないから正解はない。途切れてもいい。形式にとらわれず人前で話せるようになるのが目的ですから」と笠原先生。子供たちは「独話」を通して「ことば」を知り、友達を知っていく。

学生時代、映画『二十四の瞳』に感動して七回も見たという笠原先生は子供たちから「厳しい先生」と恐れられている。しかし、卒業して講義形式が多い中学の授業にあきたらず先生の授業を懐かしんで寄ってくる教え子も少なくない、という。　（博）

神奈川新聞

この人

国語教育部門で財団法人博報児童教育振興会の第16回「博報賞」を受賞した

笠原 登さん

川崎市立中原小教諭。国語教育に関する業績は数多いが、八年前から同小で取り組んでいる「独話活動」が受賞の対象となった。

毎朝、始業前の十五分間、全学年の各クラスで児童が一人ずつ立ち、級友の前でテーマに即して短いスピーチ。その後、聞き手のクラスメートと〝感想交流〟―。「人前で、自分の考えや思いをまとめて話す。これを繰り返すことで、児童たちの表現力は格段に豊かになります」と、力を入れる。

児童たちの短文をまとめ回覧する「一枚文集」も、国語力向上への効果的な指導法として、評価された。

地道で息の長い実践活動の背景には「授業中、一言も話さない子、話せない子の存在」がある。「義務教育の九年間、黙って席にすわり続けることは、子供らにとって〝地獄〟そのものなんです」。教科書重視、一方的な教え込みなど、教師中心の授業に対する反省、改革への思いも、活動の原動力になった、と語る。

いわゆる「わかる授業」「楽しい授業」には、いささか批判的だ。「優秀な子を中心に特定の数人が発言して事足れりとする実態では…」。作文教育についても「肉声での対話を交えねば生き生きした心の交流は図れない」と限界を指摘。

教員生活二十六年のベテランだが、ほうようとしたムードを漂わせる。児童らも「スポーツ刈りの面白い先生」と、親しげ。幅広い人柄は趣味の多彩さにも。[illegible]をはじめ落語、映画、野球など、いずれも〝狂〟の字がつく。　（岸田 實記者）

かさはら・のぼる　生っ粋の川崎っ子。35年、横浜国大卒。中原小で現在、4年2組を担任。川崎市麻生区高石に母と夫人、二女。48歳。

我が家の宝物と言えば、1985（昭和60）年11月15日に行われた「第16回博報賞授賞式」の朝日・神奈川新聞の記事と写真（上段掲載）です。両方読むと一体化して楽しく読めます。「博報賞」をいただきましたが国語では全国で唯一の賞です。ますます心は高みに向かいました。また当時、NHKの加藤アナ（現チーフ・ディレクター）が10年間教え子たちを追って、「この独話教育では、誰でも人前で話ができるような子に育つ」と断言してくれました。確かに文集に載せた児童全員が甲乙付け難く素晴らしいのです。

学級の子どもたちは教室の見学に人が来ることにも慣れ、自分の感じたことを憶せず話し、笠原登先生はと言えば、飛行機は国内便でも怖くて乗れなかったのに、チケットを自分で買って日本国中（北海道・四国を除く）の県に講師として出掛けて行き、昇進には目もくれず3回も断って、現場の子どもたち第一でした。良き時代でした。

「くつ箱ポスト」も記事になりました。これは児童が先生の靴箱に手紙を入れておくと、翌日先生から返事が返ってくるというもので、話が苦手な子、話せる子それぞれの良い所を育てていきます。職員室の先生方にも週1回プリントを配っていて、それはそれは大変でしたが、学校全体の独話活動につなげることができました。ガリ版刷りで右手の神経を痛め、やがて右手が使えなくなってしまいました。それ以来書道は左手で書いています。

私は「書」をひたすら続けていますから、高校に入った時、絵が好きでしたが、「書」か「絵」か迷いました。長屋風の部室に集まってくる部員の雰囲気はなぜか異なりましたが、私には「書」の方が合っていると漠然と感じました。「書」はリズムとスピードが要求されるので、体育系か音楽の好きな人に向いていると後に聞かされるのですが、私は卓球が大好きでした。迷いましたが「書」を選び正解でした。

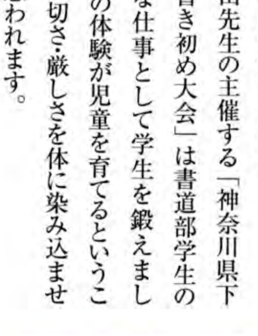
部室で国大の学帽をかぶった笠原登（秋水）と出会い、その時見せていただいた月例競書用の書道誌『白鷺』（中山鶴雲教授発行の手本集）に衝撃を受けました。お手本は線質がさわやかで、伸び伸びと温かく、人柄が偲ばれる、こんな字が書きたい、そんな思いに取り付かれました。あれから65年ほどたったでしょうか。部長になった時、すぐにお手本は『白鷺』に変えてしまいました。この学校には書道の専門教師はいなかったのです。

中山先生の主催する「神奈川県下学校書き初め大会」は書道部学生の大事な仕事として学生を鍛えました。この体験が児童を育てるということの大切さ・厳しさを体に染み込ませたと思われます。

私としては、全国を飛行機で飛びまわっていた多忙な秋水が「両輪を回す」と言っていたことのために、いずれ必要になる書の道の資料を集めることと、知識を深めることに専念。日本書道大学に7年、早稲田大学講師の駒井鵞静先生に3年間指導を受け、それが今につながり、書道の「詩文書」という分野で学べたので自分を大きく育てられたと思っています。

秋水は今、凌雲社会長と、凌雲書芸研究会の編集を二股にかけ、その他、独話活動の言葉の教育実践学習会で月1回、昔のDVDを見せながら主宰を務めていましたが、その幕だけは降ろされます。コロナ禍で最後に延期された全国レベルの催しは来年になる見込みですが、NHKの加藤チーフ・ディレクターと秋水とで講演を行いますので、お楽しみに。どなたでもお申し込みください。

こうして秋水教育を私は支えてきました。そして、私も支えられてきました。今の私の存在はそこにあると思います。



年末年始に開催した「古風七草粥の会」パネル展の題字は、笠原恒子さんの作品

文化講演会報告
「新型コロナウイルス感染症の現状とこれから、そしてワクチン」

川崎市健康安全研究所 所長　岡部 信彦 氏

文化サロン部では、昨年2020年3月に予定していた東京オリンピック・パラリンピックの開催にちなんだ文化講演会「かわさきパラムーブメントin麻生」が、第1回緊急事態宣言下でやむなく中止になりました。

今年は、市民が最も高い関心を寄せているであろう「コロナ」について、3月6日に開催を予定し準備を進めてきましたが、3回目の緊急事態宣言下で開催できなくなりました。しかしながら、ぜひこのテーマについては実行したいと思い、役員会のご配慮をいただき、定期総会の後の記念講演という形式で行うことになりました。残念ながら、総会参加者限定で例年のような一般参加者を募ることはできませんでしたが、文化協会会員に加えて社会福祉協議会関係者などからも参加者がありました。

ご講演いただいた岡部信彦川崎市健康安全研究所長

さて、ご講演をいただいたのは、岡部信彦川崎市健康安全研究所長です。講演内容については紙幅の関係もあり、またコロナ禍は現在進行形でもあるので、状況が変化していることから、詳述は避けたいと思います。

岡部先生は、内閣官房参与、新型コロナウイルス感染対策分科会構成員も務められていて、テレビや新聞などのマスメディアでも積極的に発言されているので、ご存知の方も多いと思います。小児科医であったこともあり、穏やかな語り口ですが、常に市民に寄り添った立場で分かりやすく発言されています。関係者・専門家と言われている方々の中でも、最も信頼できる方の一人だと思います。

これまでの経過とそもそもコロナとは何ぞやというご説明だけでなく、変異株や私たちの関心の高い治療薬、ワクチン接種などについても、詳細なデータやエビデンスを用いたパワーポイントの資料を駆使しながら、分かりやすくお話しいただきました。また、風聞やSNSなどの情報に惑わされることなく、さらに患者や医療従事者、エッセンシャルワーカーへの差別などコロナ禍によって引き起こされる社会的課題まで言及されました。先生の話を伺うことにより、コロナ禍に対する不安の多くが取り除かれるようでした。

誇張ではなく、先生が身近におられることは、まさに川崎市民の財産といえます。市のホームページや広報紙において、時々刻々と変わっていくコロナ禍の状況にあって、岡部先生が的確なご示唆を与えていくことに安堵を感じながら、皆さんにも今後とも先生のご発言に耳を傾けていただくことをお願いして、今年の文化講演会のご報告とします。

（文化サロン部　板橋 洋一）

舞台衣装の女優さんを描くデッサン会

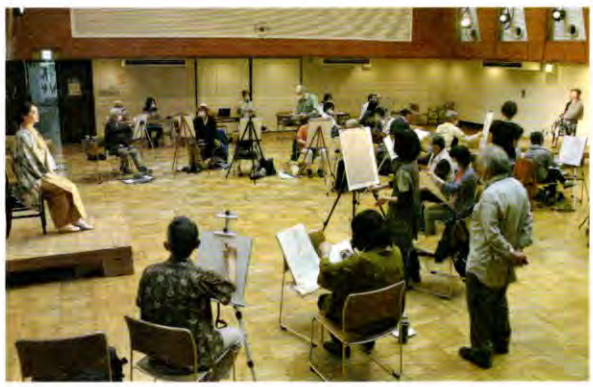
麻生区文化協会では、発足以来37年にわたり、黒川に稽古場がある「劇団民藝」のご協力を得て、「舞台衣装の女優さんを描くデッサン会」を企画し、一般の方の参加を募って開催してきました。

今年のデッサン会は6月19日の午後、市民館大会議室にて開催しました。モデルは民藝所属の八木橋里紗さんと新保有輝美さん。お二人には、「アルテリッカしんゆり2021」のフィナーレ公演「泰山木の木の下で」に出演された時の衣装でモデルを務めていただきました。お二人とも舞台での役になりきってのポーズで、参加者はとても満足していました。

デッサン指導には、麻生区美術家協会の佐藤英行、千葉純子、松田洋子と筆者があたりました。昨年に続き、コロナ感染防止のため募集人数を30名に絞り、当日の参加者は29名でした。

来年3月7日(月)～13日(日)に開催予定の「アルテリッカ新ゆり美術展2022」には、今回のデッサン会の素晴らしい作品が展示されることでしょう。お楽しみに。

（美術工芸部　佐藤 勝昭）



今後の『からむし』のあり方を語りあう

～広報部長経験者との座談会～

文化協会会報誌『からむし』の今後のあり方を語り合う座談会を7月20日、ホテルモリノ新百合丘8階ラウンジにて開催。広報部長経験者と広報委員が参加しました。

＊　＊　＊

会長　暑い中、お集まりいただきありがとうございます。会報誌『からむし』は第70号を迎えましたが、このコロナ禍、総会でのご意見もあり、今は本誌のあり方を考える良い機会だと思います。必ずしも古いものが良いとは言えませんが、先輩のご意見を伺い、古きを学びこれからのことに活かしたいと思います。

司会　1986年に発行した『からむし』創刊号の4面に、中村静子さんが「麻生区文化協会の歩み」を書いておられます。1982年の麻生区誕生と前後して、文化活動に携わる多くの方々から麻生区文化協会設立の意向が伝えられ、多摩区文化協会からの委員、藤田・志村両氏が呼び掛けた設立準備のための世話人会において、「…今まで協会は芸能関係中心に優先されたこと…設立される文化協会は区民の生活の中の文化を文化としてとらえ、区民に開かれた場でありたい」とあります。私たちは文化協会創立時に一度立ち返って『からむし』を見直したいと思います。

それでは、歴代広報部長の編集方針などをお話し願いたいと思います。まずは現広報部長から。

横須賀　私は「こういう『からむし』を作ろう」というような気持ちを持たず、ルーチンワークとして続けてきました。1ページ目が「麻生の自然と風物」、後半で文化活動を、というふうに、決められたことを粛々とやっただけでした。

関森　私も『からむし』の方針なんてものはありませんでした。すっかり記載ページや内容が決められていましたし、編集会議は皆さんベテラン揃いで、パッと動いてあっという間に出来上がっていました。私の仕事は原稿の取りまとめと校正、印刷業者への橋渡しだったように思います。

松田　私の場合、当時の杉本会長から急に広報部長になってほしいと依頼されました。一度は断ったのですが、杉本先生に押されて、やってみることにしたのです。

広報部長をしていた時は、実は、千坂さんの存在が心強かったです。何かあれば、千坂さんと杉本先生のアドバイスがいただけました。

『からむし』は以前から読んでいて格が違うと思っていましたが、年2回ならなんとかなると引き受けました。引き受けたからには、できるだけのことをして、ちゃんとしたものを出したい。依頼原稿も必ず本人に校正してもらうようにしていました。ただ、字数が多くなって縮めてもらうのに苦労しました。

千坂　私は、松田さんに何かを教えたという記憶がありません。

創刊号の中村静子さんの文章は、創立時の藤田親昌さんの思いだったのです。文化協会は芸能関係だけではいけないという。

私は杉本会長にだまされて文化協会に入りました。当時、教員をやめて新百合トウェンティワンホールに再就職して受付の仕事をしていたのですが、ある日、杉本先生が来て三千円出せと言われました。お金を渡すと「文化協会会費受領証」を渡され、会員にされていました。そして広報をやれと言われました。

ある時、大学の公開講座を受講し、そこで機関誌はどうあるべきかなどを学び、麻生区の文化協会はそういう人が育てるのだと感銘を受けました。

『からむし』では、表紙の写真で「句碑」の撮影を引き継ぎ、高石神社の句碑を片っ端から撮りました。高石神社の階段の上にあった句碑は、江戸の始めに俳句が生まれた時の句碑でした。麻生の句の会は高い志を持っています。高石だけで句碑が40数個もありましたから。その取材をして、句碑の表紙はやめました。

そして、私が始めたのは「麻生の人物風土記」でした。記事に取り上げたのは、高石のゆりストア創業者の笠原さん、細山の土方さんなどです。土方さんは亡くなっていたのですが、箕輪先生が「土方さんは、あの山もこの山も全部売って、農業振興の会の赤字を後始末された責任感の強い人」と紹介されたからでした。人物風土記の最後は杉本先生です。

その後、1998年から田口さんが加わり、2004年から松田さんが部長になりました。

岩田　私は細山を開発した白井さんを取材しました。広報委員になった時、千坂先生に白井さんについて書きなさいと白井さんの本を渡されました。それが広報での最初の仕事です。『からむし』第49号で「郷土の開発と発展に尽くした白井金治郎さん」という記事を書きました。

会長　他区の会報誌は、どれも活動報告のみ。活動記録の写真集みたいなものです。「麻生区の会報誌はこんなに素晴らしいですよ」と総文連などで配っていますが、他区はとてもついて行けないと言っています。

橋本　先人にいろいろやっていただいたので、『からむし』は良いものになっているのですね。

司会　松田さんは、今の『からむし』にご意見があると伺っていますが。

1986（昭和61）年の創刊から、時代とともに変化してきた『からむし』
（上段左から創刊号・第20号・第27号、下段左から第40号・第59号）

松田　A4サイズにしたのは良かったです。でも、例えば第69号の行政の方への依頼文は文字ばかり、小見出しを付けるなどレイアウトを工夫すべきです。内容さえ捉えていたら、短い文章の方が読み手に感動を与えます。会員の活動紹介も1ページにすべきです。

橋本　依頼原稿では、趣旨をしっかり伝えることも大事ですね。やはり、できれば取材して書きたいものです。それから、会報誌は時代の背景や年号が入っていると良いと思います。

　コロナ禍では、ともすれば文化は「不要不急」とされることも多いでしょうか。誌面では、行事やイベントを紹介するという視点だけでなく、会員の皆さんの思いや気持ちを伝える取り組みも大切なことです。それが十分にできていないことが反省点です。

会長　第59号に載った岩田さんの「麻生アーカイブス⑴『華沙里通信について』」はとても良かったです。最近の人は、ギャラリー華沙里であのような文化があったことを知らないでしょう。伝えていくのも本誌の役割です。『からむし』は、新百合ヶ丘という新しい街ができたことから始まりました。雑木林が街になりましたが、この街で育った人にとっては、ここがふるさとです。

松田　私には子どもが二人いて、調布と横浜に住んでいますが、ふるさとは柿生です。当時の友人と新百合ヶ丘や柿生で会っていて、今でも思い出話は「柿生」です。

　若い人たちに取材したいですね。余裕があれば、雑談の中からフレーズでも単語でもメモをとっておいて、取材すると良いのではないでしょうか。

小田島（紀）　文化協会会員の中には、隅から隅まで『からむし』を読んでいる方がいて、そういう文化度の高い方々が文化協会を支えてきました。しっかりしたものを作らなければと責任を感じますね。

　おじいさんやおばあさんが有名人の子どもたちを取り上げても面白いかも。

小田島（寛）　『からむし』の創刊号を読んで、書いた方の深い思いが伝わってきました。自分の考えや麻生区への想いを語っていて、敬意を感じました。

　せっかくの会報誌ですが、読者は少ない。会員以外にも広く読んでほしいですね。

松田　会員の会報誌だから会員の活躍を大切にしなければなりません。団体会員の取材記事も良いかもしれません。

司会　お忙しい中お集まりいただき、貴重なご意見をありがとうございました。これからの『からむし』に活かしていきたいと思います。

（司会と文／佐藤 勝昭）

第37回麻生区文化祭のお知らせ

今年もコロナ禍中ではありますが、文化協会では「できることをやってみよう」と、感染対策を十分に行い、文化祭を開催予定です。

邦舞・邦楽

◆9月18日㈯ 12時30分開演

麻生市民館 ホール

第1部 12時30分 各社中

第2部 14時40分 太鼓、師匠の舞踊

昨年は練習会場が封鎖になるなどして十分な準備ができず、不参加となりました。今年はさらに厳しい状況ですが、練習会場を確保し、練習することができること、2年ぶりに舞台で発表できることへの喜びと感謝の気持ちで、稽古に励んでいます。

当日は、安心してお越しいただけるよう感染対策を十分に行い、会員一同ご来場をお待ちしております。

第37回吟詠大会

◆9月18日㈯ 13時30分開演

麻生市民館 大会議室

文化祭の舞台芸能部門に「詩吟の部」が設立されて37年になりました。その間、参加団体の変遷があり、代表者も世を去られたりして入れ替わりました。参加会員は顔馴染みとなり、毎年再会を楽しみにしています。

詩吟は詩を諳んじることで脳を活性化し、思い切り声を出すことで心肺機能の向上を図り、老化を防ぐ効能があると言われています。90歳を越えても元気に続けている方も珍しくありません。文化祭では若い方も出吟して彩を添えてくれています。

現在の参加団体は4団体。毎年各団体が役割を分担し、交替しながら仲良く大会を運営しています。古き伝統文化の詩吟をぜひご鑑賞ください。

洋舞

◆10月30日㈯ 16時30分開演

麻生市民館 ホール

昨春開催予定だった第36回かわさき市民芸術祭ではグループから出演者を募り、麻生区ならではの作品「くるみ割り人形」を公演予定でしたが、最終段階で中止に。惜しくも幻となってしまいました。以降、密になる稽古を避け、オンラインレッスンなどの工夫を重ねてきました。昨年、コロナ禍の中の文化祭では念入りな準備や会員相互の認識の確認など例年にない緊張感で、無事に終了することができました。その経験を踏まえ、洋舞ぐるーぷは今年の文化祭に向けて歩みを止めず頑張っています。

各スタジオも現在、中止・延期になった会の実施に向けて奮闘中。幼児から大人まで、不安ながらも目標に向かい気持ちを切らすことなく、久しぶりの舞台に向けての意欲が感じられると聞きます。このような時こそ芸術・文化の力を発揮し、明るい気持を大切にしていきたいと願います。

第33回麻生区俳句大会

◆10月30日㈯ 13時開始

麻生市民館 大会議室

第1部 13時 表彰

第2部 14時 講演「俳句を楽しむ」

講師 栗林 浩 氏

文化協会の大きな事業の一つである俳句大会は、今年で33回目を迎えます。第1部では応募句（投句締切済）の中から、川崎市長賞はじめ9つの賞と優秀賞20句が決定し、表彰されます。第2部では、例年開催している当日の席題句会は今年も中止としますが、代わりに俳句界の素晴らしい先生をお招きして講演会を開催します。この機会にぜひ俳句を学んでみませんか。

※俳句大会に応募していない場合は、講演会参加費千円が必要です。

美術工芸展

◆10月29日㈮～11月3日㈬ 10時～17時

麻生市民館 市民ギャラリー

今年は絵画13名（新会員2名含む）、彫刻1名、書5名、工芸4名、写真6名、絵手紙1名、いけばな2名の計32名が出品予定。さらに、ウォールギャラリーには秋水書道会の皆さんの作品も展示します。絵画部門に新会員を迎えたことは、美術工芸部にとって大変うれしいことです。

※麻生フィルハーモニー管弦楽団 第73回定期演奏会 中止について

演奏会の実現に向け、感染予防対策を講じて練習に励んでまいりましたが、コロナ感染第5波で発出された緊急事態宣言に基づき、約70名が集う練習は自粛した方が良いと、やむを得ず中止の判断となりました。演奏会を楽しみにしてくださっていた皆様には、深くお詫び申し上げます。

編集後記

文化協会会報誌『からむし』は第70号を迎えました。すでにお気づきかと思いますが、今号から全ページがカラーになりました。70号記念企画としては、このたび麻生区が迎えた新しい区長と菅原会長が対談を行い、新区長の生の声を伺いました。また、歴代広報部長を迎えて『からむし』のこれまでを振り返るとともに、これからのあり方を話しう座談会も開きました。

編集委員一同、『からむし』の一層の充実を目指し、これからも新しい取り組みを進めてまいります。

コロナ禍はいまだに終息の兆しを見せず緊急事態宣言下にあります。文化祭の成功を祈るとともに会員各位の息災をお祈りします。

（佐藤 勝昭）

【編集委員】岩田 輝夫、小田島 紀美、小田島 寛（写真）、佐藤 勝昭、関森 田鶴子、橋本 周、横須賀 朝子

麻生区文化協会会報 からむし 第70号
2021（令和3）年9月1日発行
発行人／麻生区文化協会 会長 菅原 敬子
編 集／麻生区文化協会 広報部
川崎市麻生区万福寺1～5～2 麻生文化センター内
☎044・951・1300
印 刷／㈱エリアブレイン